

東北はしご登山旅行記

1 焼石岳のあらましと紅葉 (写真1)

この度訪れた焼石岳は、岩手県と秋田県の境、かつて学校の地理で習った『奥羽山脈』の一角を成しています。標高は 1,548m で、頂上からは北方に岩手山、西方に鳥海山を望むことができます。

歩いていて気づいたのですが、どうやら亜高山帯針葉樹林を欠いているようで、昨夏訪れた月山などとともに、日本海に面する東北地方の山に共通する特徴なのかも知れません。なお、山頂に近くなると多くが笹に覆われている印象で、一部でハイマツが見られました。

紅葉の盛りは、1,000m 以下だったようです。写真は標高 1,000m 付近のブナ林の様子です。同時期の関東地方では、1,300m 前後の奥日光辺りなどが見頃と思われます。

2 ツキヨタケ (写真2)

この度最も印象的だったのは、ツキヨタケでした。こちらも 1,000m 付近のブナ林内。何十年も前シイタケに似ている毒キノコとして習いましたが、お目にかかったのは初めてでした。

写真の白枠内は、一つを裂いてみたものです。断面の付け根付近（白矢印）が黒いシミとなっていて、このキノコの大きな特徴と言われています。なお、行き会った地元の方々が教えてくれて確信できました。

3 赤い実

3-1 ツルアリドオシ (写真3)

千葉県内では古いスダジイ林などの林床で見られるので、すっかり照葉樹林の植物かと思っていましたが、改めて調べてみると、暖帯、温帯の山林、山地から亜高山帯にかけて生育などとあります。昨夏、月山でも見かけました。焼石岳では、ブナ林内の林床で多く見かけました。

花は初夏に、2 個ずつ咲きますが、実は一つずつ茎の先に付いています。ちょっと不思議です。その訳は、お読みくださっている方々それぞれ、お確かめください。

3-2 ヒメモチ (写真4)

北海道南西部から山陰地方に至る日本海側に分布する常緑低木で、多雪地帯のブナ林に生育するそうです。因みにモチノキは高木となります。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

ミヤマシキミ?と思いましたが、葉に臭いがありませんでした。同種は岩手県内北上山地が北限だそうです。ヒメアオキ?は葉の縁に鋸歯があります。

3-3 ナナカマド (の仲間) (写真5)

赤い実、一つ食べてみましたが、美味しくはなく後味もいつまでも口の中に残っていました。

ナナカマドの実には、保存料(ソルビン酸)と、微量な毒成分(アミグダリン)が含まれていて、冬の間も腐ることなく、また凍ることで毒成分が分解され、冬の野鳥たちの餌となるそうです(北海道森林局『北海道の木のえほん』より)。

それにしても、これらの赤い実、雪深い冬の山、一体誰が訪れ、食べるのでしょうか?

4 ミネウスユキソウ (写真6)

と思われます。天然のドライフラワーとでも申しましょくか、とても渋い感じで、印象的でした。

ウスユキソウと言えば、この他、ミヤマウスユキソウなど国内では数種類が分布生育しています。早池峰山に生育するハヤチネウスユキソウがヨーロッパアルプスに生育するエーデルワースに最も近いと言われており、かつて同山を訪れた折り、とてもやさしい感じを受けました。

5 ヒメカイ (写真7)

写真は植物のものではありません。宿(焼石岳温泉、とても良いお湯でした)の名称です。隣接のスキー場の名称も同じだったので、宿のスタッフに名称の由来を尋ねてみました。そうしたところ、回答は以下のサイトにあるとおりでした。正しくはヒメカイウのようです。お確かめください。

[幻の花 ヒメカイウ 胆沢まると案内所](#)

6 伊豆沼 (写真8)

タイトルに『はしご登山』と書きましたが、その2日目は、まさに高山植物や紅葉で有名な栗駒山に登る予定でした。ところが、残念ながら雨の予報。実は何年前に訪れた時も、確か台風に伴う悪天で諦めました。またいつの日か訪れることにしましょう、3度目の正直を信じて!

そして訪れたのが伊豆沼。車で1時間ほどの移動でした。写真は近隣の水田。たくさんのマガンが羽を休めていました。サンクチュアリーセンターを訪れ、様々な保全活動が行われていることを改めて知りましたが、詳細は割愛します。

(記: 茂原市 望月)



写真5



写真6



写真7



写真8

ノビタキの狩り

ノビタキはスズメとほぼ同じ大きさで、目がクリクリした可愛い小鳥です。

東北の高原や北海道の平地で繁殖し、南へ渡る途中の9月末から10月に関東を通過して行きます。

鳥の写真仲間が我が家の菜園に近い水田地帯で見たと情報をくれたので、探しに行ってみました。

畔と水田が見渡せる農道脇の空き地に車を止めて、中で静かに待っているとすぐ近くまで来てくれて、窓からレンズを出して撮影しました。いずれの写真もトリミングして口元の餌が見えるように拡大してあります。

この写真から餌になっている昆虫の同定できる方は教えて下さい。

撮影日は10月6日と7日です。場所は佐倉市小竹

佐倉市 坂本 文雄



水田の畔に生えた背の高い草の上で周囲を見渡して虫を探しています



開花中のセンダングサ群生に飛び込んでハナアブの仲間と思われる虫を捕まえました



地面に下りて啜えてきたのはヒゲの長いバッタの仲間。啜え直して頭から丸呑み



トンボが竹竿の先に止まろうとした瞬間に同じ場所に止まろうとして飛来したノビタキと鉢合わせ

ムシたちの秋 命をつなぐハラビロカマキリ

連日 35℃を記録する猛暑日が続いていましたが、ようやく朝晩は涼しく感じられるようになりました。さらに日が短くなっていることにより気持ちごとく落ち着かなくなります。ムシたちは、厳しい冬が来る前に命をつなぐ動きが活発になり、姿をよく見かけられるようになります。

身近なムシの代表であるカマキリの一種「ハラビロカマキリ」は、私の庭の常連で、夏以降にオミナエシの花で見かけられるようになります。私は、毎年、ハラビロカマキリの様子を愉しんでいます。

＜交尾までのプロセス、そして・・・＞



15 時 10 分

庭のオミナエシの花の下でオスがじっとしていました。オスの視線の先にメスがいました。交尾の間を見るチャンスでしたが、オスの動きが慎重で私は、しびれを切らして目を離してしまいました。



16 時 14 分

オスの姿が無く、メスは、蜂を捕食していました。よく見ると足の数と翅が多く見えます。「メスの向う側にオスがいるに違いない」と思い、反対側に回り込みました。反対側に回りカマキリの姿を確認した私は、思わず「ギョッ!」としました。なんと、オスの頭から前胸までが無くなっていたのです。頭を食べられたオスが交尾を続ける姿は良く知られていますが、前胸まで食べられても交尾を続けているのに驚かされました。



＜ハラビロカマキリの一年＞



若い幼虫、腹を跳ね上げた姿が愛らしいです。



中齢～終齢の幼虫、翅芽（翅の基）が目立ってきました。



敵に出会うと、前足を広げて自分を大きく見せて威嚇します。



木の枝に産み付けられた卵鞘、木の太い幹や塀、電柱などでも見られます。

＜役目を終えたメス＞



2024 年 10 月下旬

ウッドデッキに 2 頭のメスを見つけました。
指で突いたり、つまんだりしましたが、全く反応
が無くじっとしたままでした。

良く見るとお腹が平らになっていました。どうや
ら産卵を終えているようです。

役目を終えたカマキリに「頑張りましたね！」と
声をかけました。

＜褐色のハラビロカマキリ＞

数は少ないですが、褐色型もみることができます。



褐色型と呼んでいますが、紫色にも見えます。
また、前翅全体に黄白色の斑点があります。

「尻もち事件」

「ウラナミシジミ」を追いかけていて、センダン草に止
まったところでレンズを向けました。ズームレンズの広
角側で一枚撮り、望遠側で一枚撮ろうとしました。
ファインダーの中で蝶の姿が大きくなってきたところ
で、蝶の向う側にカマを構えているカマキリの姿が浮か
び上がりました。「うわあ！」と声をあげて尻もちをつ
いてしまいました。



センダン草に止まったウラナミシジミを、広角でパチリ。

拡大



西野 孝法（千葉市）

コミュニケーションは力？

自然観察指導員講習を受ける前、21世紀の森と広場で毎月観察会に参加していた頃、昆虫、植物を観察する皆さんの博識さに驚いた覚えがあります。観察会の先頭に立っているのが生物の専門家で、同じような専門家が2人、3人という、一人は鳥類、一人は昆虫が専門、あっちからこっちから植物や昆虫の生態を説明が始まると、こちらは観察しながら、耳を傾けながら、説明される言葉を必死にメモに取っていたのを覚えています。後から読み直すと部分同士がさっぱり繋がらず図鑑に頼って辻褄を合わせるといふ観察会その後でした。

子どものときには白いチョウチョはモンシロチョウだけだと思っていたのですが、スジグロシロチョウの数が多いのびびっくりしました。参加して2、3年経つと季節ごとに出てくる昆虫、植物が何となくわかり始め、来月はアメリカセンダングサ、コセンダングサが黄色い花を咲かせ、花が終わると果実が靴下の繊維を潜り抜けて足の裏をつついてくるなど想像を巡らせるようになりました。

いつも同じ公園で観察会をしていると、自分の知識はどれほどのものなのか？ちょっとわからなくなり、不安に駆られてきました。そこで、全く知らない土地で観察会をすることにしました。もちろん自分一人です。

さて、どこで一人観察会をしようかと悩んだ末に、野草があつて、昆虫と鳥がいそうなところということで、畑や草原が広がっている近場として、買い物に行くたびに千葉ニュータウン近辺はどうかと思い、白井市あたりにねらいをつけました。農地が広がり、川沿いは野草が繁茂していました。一人観察会で歩いてみました。別の土地にいくと、野草と言っても区別が付きません。写真撮影して図鑑で調べ、植物ごとにファイルに納めるというようなことを休日のたびにやっていました。川沿いにはマガモが泳ぎ、大きな農家の屋敷に驚いたり、二股の大根を供物に捧げる神社があつたりと、のどかな田園風景を楽しむことができました。

北総台地は同じような植生なのではないかと、武蔵野線に乗り、東武線に乗り継ぎ、栃木や寄居、小川町まで出かけました。低山をめぐるのも楽しいかもしれないと思ったのと、休日に遅く起き出して出かけられるのがそのあたりでした。かなりルーズな一人観察会でした。官ノ倉山に向かう途中、急坂に作られた手作り階段脇にキチジョウソウを見つけた時などは、「こんなところに」と今まで見向きもしなかった場所に目がいくのに自分でも驚いた記憶があります。

さらに、折り込みミニコミ誌に掲載される全く別の団体が行う観察会にも参加してみました。Yの会、FIO会、面白くて、ためになる観察会ばかりでした。ところが、そこで出会う人の中にAの観察会、Bの観察会で出会ったことのある人がいることに気がつきました。同じ趣味の人は同じような集まりに集うというのが分かりました。「〇〇では、××が咲いていましたね」、「それ見たいと思っていたんです。今度見に行きます」といった情報交換ができるようになり、現役時代には感じるができなかったコミュニケーションの力がぐつぐつと沸き上がり、一回り大きくなった気になりました。

(松戸市 藤田 隆)



キチジョウソウ